

売春は中世でもルネサンスでも存在した。中世では黙認され、ルネサンス期では許容の上、制度化もされた。高級な娼婦も出現して、詩作や音楽に秀でた才能を開花させた例もある¹⁰⁾。

生身の文化

いずれにせよ第六十二話は精神よりも身体の優位を、罪でなく恥の文化を教示してくれた。一般的にキリスト教的的精神世界一色とみなされがちな西欧中世社会の中にも、こうした身体を出発点とする人間的感情の豊かな文化があったのである。これは世俗の文化であり、散文で語られるのが妥当であろう。間近に迫っているルネサンス文化の世俗性と相通するものが見える。これこそ地に足のついた「生身の文化」なのである。

そして、この生身の基調音がポッカッチョ『デカメロン』で肉欲の肯定として花開く。

2 肉欲の肯定

女色

第Ⅱ章で触れるが、『デカメロン』では機知を隠れたテーマにした物語が多い。ここで取り上げる二話は、その中でも異色の部類に属するものである。というものの主人公が修道士と貴婦人だからであり、扱うテーマも女色に関するものなのである。

若い修道士を主人公とする一日目第四話は「こんな話である。

ルニジャーニという村にある修道院に、「断食や不寝番をいくらしてみても、薔薇色の肌と身体のなかの力を潰すことができない若い修道士がいて、ある日、他の修道士が眠っている屋さがりに、教会堂の人里離れた寂しい場所で、「一人の大そう美しい娘を見かけた」。激しい欲情にかられた修道士は娘に近づき、くどきおとして自分の小部屋に連れこむことに成功する。そして二人で快楽にふけるのだが、そのとき眠りからさめた修道院長が小部屋の前を通りかかって物音に気づく。と同時に修道士の方も誰かの足音に動づき、「小さな穴から覗いてみますと、まぎれもなく僧院長の聞き耳をたてている姿が見える。それで覚悟をきめて「ただちに智慧をふりしぼって、何らかの有効な策を探そうと努め」る。

修道士は表へと出て、小部屋の鍵をしっかりと閉めるや院長の部屋へ行き、外出のときの慣例に従って院長に鍵を差し出し、薪を運ばせるために森へ行つてくると嘘をつく。院長は「若者の過ちをもっと詳しく知りたいと思っていましたので、自分に見られたとは露知らぬような相手の素振りに、これ幸いとして、むしろ喜んで相手の鍵を受け取るや、素知らぬ顔で彼に外出の許可を与え」る。

院長は修道士が立ち去ったあと、足音を忍ばせて小部屋に行き娘を見て、それが美しくうら若い乙女であるのを見てとるや、老齢にも拘らず激しい情欲の湧いてくるのを感じて、思わず次のように呟いてしまう。

ああ、不満やら不快ならばいくらでも身边に用意されているこの世にあって、喜びが手に入れられるときに、なぜわたしはそれに手をつけようとしなのかい？ これは美しい娘だ。彼女がここにいることなど、この世の誰も知りたくない。わたしの喜びをこの娘の身に与えることができるというのに、なぜそうしてはいけないのか、わたしにはわからない。誰に知られるというのだ？ 誰にも知られはしないだろう。そして人に知られぬ罪は、半ば赦された罪なのだ。これほどの機会はまず二度とめぐってこないだろう。神さまがお恵みをくださるときに、その喜びを手に入れるのは賢いわざだ。わたしもそう考えている。

引用文中の傍点は私が打ったものだが、この都合のよいあつけらかんとした機転は実に見事である。

こうして院長は自己弁解して娘と快楽にふける。ポッカッチョはこの行為に対して何ら批判めいたことは書か

ず、談々と筆を進めていく。

ところで修道士は院長の行為を小穴から覗いていた。自分の思い通りになったのである。そこで院長のもとに戻った若者は、

院長さま、聖ベネデクトの修道会に入りましてこの方、まだ日も浅いために、わたしは教えの細目にまで得心するに至っておりません。それにあなたさまは、見習修道士が断食や通夜と同じように、女色の苦業もしなければならぬ、とはまだお諭しになれませんでした。でもいまは、それをお示しくございましたので、このたびの罪さえお許しいただけるものならば、二度と同じ罪を犯さなければかりか、これからはあなたさまのなさるのを見せていただいたのと同じようにすることを、お誓い致します。

これを聞いた院長はすべてを得心して、お互い同罪であることを知ると、「相手を許して、見られてしまったことは他言しないように命じると、ひそかに娘を外へ脱けださせ、その後は何度も彼女を招き入れさせた」。修道士の方は計画通り、その機知のおかげで危機をなんなく通り抜けることができたわけである。

機知から美德へ

次に挙げる一日目第五話^{ごご}は、「女性にとっては自分よりも身分の高い男性の愛を退けることこそ、かぎりない大きな智慧」を必要とする、という内容をテーマにした話である。

物語はモンフェット侯という武勲の誉れ高く、ローマ教会の護衛長官も勤めた男の妻と、フランスの隻眼^{ひとめ}王フィリップとの間の出来事が中心である。

この世にモンフェット侯爵夫妻ほど似合いの夫婦はなく、かつモンフェット夫人ほどに類稀な美しさをたたえた女性はいない——このような言葉がフィリップ王の耳に入り、王はまだ見ぬうちから、たちまちに激しい恋心を夫人に抱く。そこで夫の不在であるのをよい機会に、夫人のもとに立ち寄ることにして、「一日まえに使者を送って、翌朝には出迎えて食事をもてなしてくれるように、夫人に予告」する。

夫人の方はこのうえない光栄と思ったが、「王にまでなられた方が夫の留守を承知で会いにお出でになるとは」いったいどういう意味なのかと深く考え込み、やがて「自分の美貌の名声に惹かれて取った行為にちがいない」と確信する。しかし夫人は気品ある女として相手をもてなそうと心に決め、「忠臣たちを召し集めて、彼らと計り、必要な一切の準備を整えさせました。ただし、ご馳走と飲み物だけは、自分で指図して用意することにしたので。大急ぎで、領内の雌鶏という雌鶏を集めさせ、その肉だけで、王の正餐にふさわしいさまざなご馳走を料理人に作らせ」ることにする。ここで雌鶏の肉だけで料理を作ることが夫人の機知の見事さであることがあとで判る。

王は予定日に到着して、夫人の出迎えを受ける。実物の夫人は話に聞いていたよりも、「遙かに美しく気高く淑やかに見え」、「その姿にいたく心を動かされて、口をきわめて誉めそやし、いっそう熱く望みを燃えあがらせながら、おのれが賛美していた以上にますます美しい女性であることを思い知る」。

こうして、王にまでなられた方を迎えるのにふさわしく、美しく飾られた部屋で、しばらく休息をとったのちに、やがて食事の時間となり、王と侯爵夫人とは同じテーブルにつきました。そして他の者たちもそれぞれの身分に応じてそれぞれのご馳走の座へとついたのです。

食事ははじまったが、王は次々と運ばれてくる料理をみて、不思議な思いにとりつかれる。なぜなら、「料理の仕方こそ異なれ、運ばれてくるのはどれもこれも雌鶏ばかりだったから」なのである。

それに、王としては、いま自分の訪れている場所が、さまざまな獣の獲れる豊かな土地柄であることを、またあらかじめ自分の到着を夫人に知らせておいたので獅をする余裕は充分に与えてあったことを、思い出したのでした。それゆえ、大いに驚き怪しんで、雌鶏の料理ばかり出てくる理由を何とかして彼女の口から聞きだしたいと思ったのです。そこで、うっとり彼女をのほろほろ見つめながらも、こう言ったのでした。「伯爵夫人、このあたりには、一羽の雌鶏も生まれずに、女の鶏ばかりいるのですか？」

夫人は、「いまこそ天なる神が彼女の願いを叶えてくれ、自分の心の内を明かす絶好の機会をお恵みください。たものと感じて、理由を知りたげな王に」次のように答える。

「いいえ、王さま、女というものは、外見や操の持ち方に多少の違いはありましても、結局はみな、ほかの土地でもここでも、同じように出来ているのでございます」

これを聞いた王は雌鶏料理とその言葉の中に隠されている美德の意味を悟って、こうした立派な女性にはどのような言葉を投げかけても無駄で、力づくでも齒が立たないと悟り、立ち去っていく。夫人の雌鶏料理の機知は美德へと高められて、王の胸（欲情）に釘をさしたわけである。

以上、二つの物語を見てきた。A機知Vが共通していることは言うまでもないけれども、当意即妙とも思えるそれら機知がみな、目上の者、身分の高い者に向けられたものであることが読み取れうるであろう。こうした上下関係で生じたいざござ（というよりも上の者に下心があるのだが）をうまく乗り切る術が描かれている。特に第五話が女性の才知をテーマに据えている点に注目したいと思う。上の者もそれなりに察しがよく、自らの恥をさらさずにすんでいる。つまり、A機知Vがそこまで考えぬかれたデリケートな、それとなく示される種類の穏やかなものだからである。これこそが真の機知と言えるのである。この意味で、機知を発する方も、受け取る側も野暮ではないということである。神の発意ではない、人間の中に芽生えた機知を当の人間が活用する様を、ボッカッチョはここに見事に結実させ、新しい人間の登場を描いている。

肉欲の肯定

この若き修道士の話やモンフェッラート侯爵夫人の話には、A機知Vもさることながら、次のようなテーマ性も充分考えられうるであろう。

それは作者ボッカッチョの反覇権主義的な考え方である。作者はこの二つの物語を通して、人間の平等性や自主性を粹に主張したのではあるまいか。平等性や自主性というのは、端的にいえば、宗教の伝統的な戒律や封建的な慣習からの脱皮を意味している。人間の持っている欲望や肉欲を認め、個人としての価値や尊厳を肯定しようという姿勢である。

修道士は、A肉Vに対する人間の弱さを、ありのままの肉欲を前にして、全面的に肯定している。それは聖俗を越えたあらゆる人間の持つ欲望の是認でもある。

モンフェッラート侯爵夫人は、彼女たち上流階層の因襲的社会を越えて、人間の個人的価値、尊厳、誠意の認識をもたらしてくれた。

ボッカッチョはありのままの人間を見つめ、それをそのものとして描くことによって、人間の内に秘められた生命の息吹を活写したのである。ここには宗教的戒律としての罪意識よりも、赤裸々なむき出しの感情が主役となって、生身の身心を彩っている。なんと私たち現実の人間に近いことか。こうした人間がはじめて提出されう

る時代がやっと訪れたわけなのであり、それがルネサンスなのである。

3 性交の相

生命的基調をなすものはむろん説話だけに見られるわけではない。第三章で詳しく論ずることになる魔術の知も、実のところこの生命主義の重要な一翼を担っている。第三章ではカンパネッラを主として扱うが、ここでは同時代のデッラ・ポルタに登場してもらって、彼が生命の根幹たる性や性交をどう捉えていたかを考察してみたい。

いきなり本論に入る前に、簡単に魔術とは何か（カ）に触れておくことにする。

魔術の自然観

「魔術」という言葉は必ずいぶんと誤解されている。

おおかたの日本人はおどろおどろしいイメージをこの言葉から連想するであろう。妖術や呪術の類のいかかわしさがつきまといっているはずである。しかし「魔術」とは、自然に対する人間の知恵のことを言う。自然に対する人間の知の有り様なのである。「魔術」にはきまって人間の知が関わっている必要がある。人間の知と技が介在して対象（自然）に何らかの効果を与えるのが魔術なのである。

ここで問題となってくるのはむしろ、対象となる「自然」の方と言えよう。自然をどのように捉えるかによって自然観が立ち顕われてくるが、西洋の自然観の歴史の中での魔術の有する自然観をいちど考えてみておく方がよいと思われる。

きわめて大雑把な分類となるが、西洋文明の自然観には二種類ある。ひとつはキリスト教による自然観で、いまひとつは魔術による自然観である。この魔術という語もキリスト教が政治的に本流とみなされたがために異端としての名をふされたがゆえについた名でもあることを忘れないでほしい。

キリスト教は唯一絶対の神を持つ一神教であり、人間はこの神によって造られた被造物とされている。そして自然はこの人間のために造られた（ト）家（ト）なのである。したがってキリスト教では自然を観察の対象として客観的に捉えて、自然界において人間だけが主体であるという人間中心の思想が生じる。自然は言ってみれば「物」であり、人間の支配や征服の対象なのである。自然は人間の意志と力によって自由に操作されうるものなのである。ここに自然開発の発想が生まれてくる。近代科学や科学技術はこの路線に沿って発展してきたのである。

一方、魔術の場合は以下のような具合になる。魔術は唯一神ではない。「一者」なる存在はあるが、生の根源としての一者であり、その下に第二、第三の神といったように、一者を光源（太陽）とすると、そこから地上（自然）へと神性を秘めた光が流れ出て、あらゆる事物に宿るのである。人間も含めた自然界の生物、事物すべてに神が宿り、人間は自然に内包された一部にしかすぎない。人間の方が自然を家とするわけである。したがって自然は人間同様「生き物」なのである。

キリスト教の自然観では自然は即物的で死せる存在であったが、魔術の自然観では、キリスト教のそれではよもや考えられぬような、万物に生命の根源たる神（一者）が宿り、自然は生ある有価値なものとみなされる。

即物的で没価値な客観的对象として自然を凝視すると、それは観察という行為へと至って、自然法則や原理が発見されて近代自然科学が興ってくる。魔術からはそうした成果は期待できない。しかし自然は生き物なのであるということから自然保護の思想が生じてくる。

キリスト教の自然観の発展形態として近代科学成立の基礎となった機械論的自然観がある。これに対して魔術の自然観は一言で表現するとアニミズムの自然観と言えよう。